

# 鼠の淨土

— 隠岐方言昔話採録手帖 その3 —

## 土部 弘

### 凡 例

- 1 咳払い、笑声など文脈中無意味なもの以外、すべてテープ再生の儘表記し、修正していない。等価値の語（音韻）であり乍ら、或る箇所では俚言（意）で語り、他の箇所では標準語（音）化したそれで話すという現象が目立つ。これが現状であるという意味で、一切修正はしていない。
- 2 方言表記（カタカナ音標文字）に（ ）のある箇所は、確かと聴取できないところであるが、その音節数だけのモーラを持つと認められる。
- 3 カナの右肩の。印は、中間母音でそのカナに近く聴取できるもの、・印は、無声化（母音脱落）を示す。
- 4 対訳（本文左欄の標準語訳——平かな表記）は、出来るだけ直訳をとる方針。しかし、文字化によって物語る場面が捨象されるから、適宜（ ）内に文脈を補った。
- 5 分ち書きの単位は、大作文節に従っているが、準詞の類は続け書きしている。

6 先学の調査に明確なものは、一切標準語訳に譲って注記しなかつた。

7 注記中の主な著書名略記は次の通りである。

△山陰語法▽——「山陰方言の語法」（広戸惇著——島根新聞社）

△山陰方言▽——「山陰方言の研究」（広戸惇担当——島根県立教育研究所研究紀要第3集）

尚、△手帖1・2▽とあるのは、次の拙稿を指す。

△手帖1▽——「キサンジ違いと屁ひり爺」（関西大学「文学論集」第6巻第3・4合併号）

△手帖2▽——「コトバ違い二題」（関西大学国文学会「国文学」第19号）

### 本 譚

採録場所——島根県周吉郡（隠岐島後）西郷町大字賀茂（旧磯村）

採録時——昭和32年7月26日

語り手——野津仰摩氏（明治27年5月20日生、満63歳）

トント ムカシ アツタモンダ。 ムカシ アル トコニナー、ジート ババト アツタ  
ずっと 昔(の次の様な出来事があったものだ(そつた)) 昔 或る 所にね、 爺(さん)と 婆(さん)と(む) (住んで居

モンダ。 バーサング ニギリメシオ コシラエテ、 イツツ コシラエテ、 フタツズツ クツテ、  
つたそつだ(ものだ)。 婆(さん)が 握り飯(焼飯)を 拵(お)えて、 五つ 拵(お)えて、(その中の四つを二人で二つずつ 食つて、

フイトツ ノコツタモンダ。 ソエオ ジー クエー。 ババ クエー。 ジー ケー。  
一つ(だけ) 残つたそつだ(ものだ)。 それ(その一)を「爺(さん)が 食え(よ)」 「い(や) 婆(さん)が 食え(よ)」 「い(や) 爺(さん)が 食え(よ)」

ババ クエー。 イツテ ヤツチヨツタ。  
「い(や) 婆(さん)が 食え(よ)」と 言つて(言(い)合(て)て) (譲り合(い)を)して居つた。

イロリノ スミニ アナガ アイチヨツテ、 アナノ トコカラ ヤキメシガ コロコロツト  
囲炉裡(の) 隅(に) 穴(が) 開(いて)居(つて)、 (その) 穴(の) 所(から) (中) (に) (譲り合(い)を) 焼飯(が) ころころと

マクレテ トータモンダ。 スルツト、 ジーサング ハチマキ シメコンデ、 ヤーレ  
転(が)つて(転(が)り込んで、速(く)まで) 通(つた) (過(き)去(つて)いた) 所(う)だ。 すると (そ)こで、 爺(さん)が 鉢巻(を) 締め込んで、 「やれ

ヤキメシガ トータ(イ)。  
焼飯(が) (転(が)つて) 行(つ)ちやつた (そ)と 呼(び)ながら、 一生(所) 懸命(で) (じ) 走(つて) (追(い)拵(け)て) 行(つ)たのだが、 所(う)したら、

ムコーニ ズゾーサング スワラシチヨツタ。 ズゾーサン、ズゾーサン、ココオ イマ ヤキメシガ  
向(う) (の) 方(に) 地蔵(さん)が 御座(り)になつていた。 (垂)「地蔵(さん) (よ)、 地蔵(さん) (よ)、 今 焼飯(が)

トーラセザツタカノー。 ヤ、 インマ トータケ、 ハヤー イケ、 ハヤー イケ。 ソエカラ イツシヨ  
 (転(が)つて) 行(き)はしなかつたかね」 (地蔵)「ああ、 今 (転(が)つて) 行(つ)たから、 早く 行(け)、 早く 行(け)」 所(う)から (そ)こで 一(所)

ケンメーデ (イキタトコ(ロ)ガ、) マタ サキエ (イキタラ、) ズゾーサン (ガ)。  
懸命で(に) (追っ掛けて)行ったところが(む)、(その)又 先(の方)へ 行った(行った所に、もう)一体の) 地藏さん(が座って居られた)。

ズゾーサン、ズゾーサン、コーナ イマ ヤキメシガ (トラーセザツタカノ。) ヤ、インマ  
(垂「地藏さん(よ)、地藏さん(よ)、) 今 焼飯が (転がって)行きはしなかつたかね(「地藏」ああ、) 今

トータ(ケ)、ハヤ イケー。 (イッショイケンメーデ) (追っ掛けて)行ったところが、 ムコーニ (コヤガ)  
(転がって)行った(から)、早く 行け(「そう言われて)一生(懸命で(に) 向う(の方)に) 小屋が

タツチヨツタ。  
立って居った。

コヤノ ソトエ (イキテ、) ミミオ (アテテ) キーチョツタラ、 (ネズミガ、) (ネコサヤ) (コネバ)  
小屋の 外へ(側まで) 行って、 (壁に)耳を 当てる 聞いて居たら(居ると、) 鼠が、 (「猫さえ) 来なければ

クニワ ワガモノ。 (トロクサ、) (トロクサ。) (イッテ、) (カラウス) (チーチョツタ。) (ハツテナ、)  
(この)国は吾(々の)物(だ)。とろくさ(糞手間、)とろくさ(と) 言(って)、 唐(曰(米を)) 搦(いて)居(った)。(「爺さんが)はてな(「そなたな、)

コイツ、 (ネズミ) フトツ (オソラケーテ) (ヤリマショートモツテ、) (カドカラ) (ニヤーオンタラー、)  
此奴(これは)、鼠(を) 一つ 嚇(して) (やりましようと思(って)、) (小屋の)門(から) (「にゃあおん」と言(ったら(猫真似

ネズミガー、 (ネコガ) (キタデツテ、) (ミンーナ) (カクレテシマツタ。) (ソノ) (コメオ) (モツテ)  
(したところが、)鼠(が(達は、)「猫(が) 来(たぞ」と言(って、)皆 (逃(げて)隠(れて)しま(った)。(鼠(を残(して)行(た)その) 米(を) 持(って)

モドツテ、 (ジーサンガ、) (バーサンヨ、) (バーサンヨ、) (ヤキメシニワ) (デヤフザツタ(エ)ゾ、) (コゲコゲデ)  
戻(って、) (爺(さんが、)「婆(さんよ、) 婆(さんよ、) (転(がした) 焼飯(には) (到(頭)出(合)わなかつた)けれども、) ころころ(「い(う)わけ

コメオ モツテ モドツタワイ。イツテ、<sup>①</sup>バーサント ジーサント ヨロコンデ、 ソノ コメデ  
米を 持つて 戻ったよ」と 言つて「ね、(それから)婆さんと 爺さんと(の二人が喜んで、(持つて帰った) その 米で

ゴハンオ テーテ クツタモンダ。  
御飯を 炊いて 食ったそうだ(ものだ)。

ソノ ムカーシ。  
その(子)と 昔(の事)なのだ。

### 後日譚

採録場所——島根県知夫郡(隠岐島前)知夫村大字郡<sup>コノヤ</sup>

採録時——昭和32年8月1日

語り手——佐藤スミ氏(明治15年8月生、満74歳)

ソエカラ、トナリノ ジーモ ヨンデコイ。 サー コメノ ママ タエーテ <sup>①</sup>クワスルツダケン  
それから、 「隣の 爺(さん)も 呼んで来い(招待せよ)。さあ 米の (御)飯(を)炊いて 食わせる(の)だから(ね)」

<sup>②</sup>テテイツタトコロガ、 ソツカラ ソノ、 トナリノ <sup>③</sup>ババガ、 ココノ ジーモ イキヤ  
と言つ(て近所)にも振舞つてじたところが、 それから その、(様子)を見ていた 隣の 婆(さん)が、「ここ(私)毛の 爺(さん)も 行けば

イーダガヤ。トナリノ ジーラチャ コメ エット <sup>④</sup>トトキテ、アノ、ワーワリヤ ヨバレツダナイカ。  
良い(のだ)よ。 隣の 爺(さん)達は 米(を) 沢山 取つて来て、あの、 吾々は(も) 呼ば(招待)される(た)ので

ワーワモ イッシヨ トトクラー。 イーテ、 トレー イキタトコロガ、 マタ コメ  
(は)ないか。 吾々も 一緒(に、同様) 取つて来よう(よ)と言つて、 取りに 行った(。)ところが、 又 (真)が米(を)

チーチヨル。ユノ マワリニ ネコサヤ オラネバ、クニヤ ワガモンジャイ。ストトコ トントン  
搦いて居る(らた)。「この 廻り(界限)に 猫さえ 居らなければ、この国は 吾(わ)の物だよ。すところ とんとん」と

テテイッテ、 マタ ニヤオ テイッタ。 アー ヨンベノ ジーダ。ヨンベノ  
言つて(米を搦いて居た。そこで)又(今度は、隣の爺が)「にゃおん」と言つた。すると眞は「ああ 昨夜の(米を騙し取った) 爺だ(ぞ)。昨夜の

爺だ(ぞ)。(と)言つてね、 (隣の爺を)引き裂いて(ね)、 (隣の爺(さん)は 咬まれてしまったのだった。 それから(そして、(隣の

爺(さん)が(その)後から (爺を)探して(に) 行つたところが(のだが、その) 婆(さん)もね、(眞に)咬まれて しまった(のだった)。

ソノ ムカシヤナー。  
その(ずっと) 昔(の事なの)だよ。

注① アッタモンダ

△モンダ△の△モン△は、△モン△モン△モン△(mono)△  
non△non△と△ン△にまで約言される△物△で、ここでは△  
ムン△に近く聴取される。double△ン△との関係については、手帖  
2、Aの注⑥参照。

注② ニギリメシ

△焼飯△(以後は焼飯となっている)の言い間違い。島前の方(知夫村  
佐藤スミ氏の物語)は△焼餅△。補説参照。

注③ クエー

四回続けて△食え△と繰り返す中に、丁寧に発音した△クエー

注④ トータモンダ

△から無造作に発音した△ケー△まで、△kue△kwe△ke△  
の三種が出揃っている。△u△i△i△i△(ツルイノツル)の音韻変化  
を持ち、イ・エの中間母音(e)を持つ隠岐であるから、△  
e△o△が見られることは異とするに足りない。しかし、この  
現象は一般的とは言えない。手帖2、Aの注⑥参照。

△トータ△は、すぐこの後で△トータラセザッタカノ△という爺  
の問いに地蔵が△トータケ△と答えている所から、△通った△  
(通り過ぎた)の意である事明瞭である。ただ△カタ△(買った)  
△オータ△(負った)等の音便形は、出雲(北部では短音形カタ・オタ)

石見及び鳥取などで、ア段・オ段の一部に（語幹）一音節（の）語についてのみ起る現象で、「隠岐は常に促音でこの変化は起きない」（山陰方言七一一二）とされている点には留意を要する。ラ行音（通リ）のウ音便（の變形）は奇異な現象乍ら、「通ったなどは二音節であるが、北部出雲ではトタとも云い、仁多郡は当然トータと云う」（同七二二）のであって、恐らく地方からの移入であらう。

移入される地盤は隠岐に充分備わっている。△買ひた（り）△かうた△が△au△u△o△の變化をとらず、△au△a△の變遷を辿った（というより、古くはuの音を持たなかったのではないかと思われる）隠岐・出雲に於いて、ハ行四段（ア・ワ行五段）の連用形に表われるウ音便が△かうた△かあた（カギ）△となる（△負ひたり）△おうた△はオータとなる）ことは自然の理であるが、当地方には一方ハ行四段（ア・ワ行五段）の促音便も存在する。△カータ・オータ△と言うと同時に△カッタ・オッタ△とも言う出雲にあって、類推作用（促音便になるものは、同時にツ音便にもなるという誤推作用）がラ行の二音節（語幹）語である△通る△の連用形△通ッ△にまで及ばされた結果が、△トータ△という語形なのであるまいか。△トール△（tofo△towo△too△to;）が二音節（語幹）語と言いつ乍らも、同母音（o）の接続した一（長）音である点がこの誤推作用を助けたであらう。

### 注⑤ スルツト

△スルト△スツト△の中間過程を思わせる語形。△それから△を△ソツカラ△（主に鼻韻）と言うと同時に△ソエカラ△（主として鼻後とも言う現象を見ると、ラ行音（狭い母音を含むリ・ル・レ）の促音化は、r子音の脱落から起った（soekara△soekara）様にも考えられるが、△スルツト（suito）△は、母音（u）脱落

が促音現象を惹起する契機になったことを示している。

### 注⑥ スワラシチョツタ

△スワツチヨラシタ△の言い違いか。当地では、△スワラシ、チヨツタ△は「その時現在、座るといふ動作を行いつつある」現然態（松下三郎著「標準日本文法」三八〇）の尊敬表現に使用し、△スワツチヨラシタ△は「その場に来て見ると、既に座るといふ動作をしまつていた」既然態（同三七六）の尊敬表現に使用する由。「△スワラシチョツタ△と△スワツチヨラシタ△とは同意でしょうか」という質問に対し、当地賀茂小学校の内田兼四郎氏は、老・壮・青年男女について調査の上、年令差なく、次の様に使い分けていると回答された。

△スワラシチョツタ△は、動作を表現している言葉。現在、今、そのある動作を見て言っている言葉。

△スワツチヨラシタ△は、その場へ来て見たら、既に座つてしまつていた言葉。

△スワツチヨル△は、△座る△に△て△居る△という準詞の付いた熟合形（座つて居る）であるが、その△座る△という動詞を、継続的動作を表わす語として使用すれば「座るといふ動作をその時しつゝあつた」ことになり、瞬間的動作として使用すれば「既に座るといふ動作をしまつて、現在座り続けている」ことになる。

△スワツチヨル△（座つて居る）△の（△て△）前後いずれに尊敬語（シ）サ四ハス△の連用形。手帖と、Aの注④参照）を付けるかによつて、△シ、チヨッ△（△て△の前）は継続的動作——現然態、△チヨラシ△（△て△の後）は瞬間的動作——既然態という差異が生じるのであって、これは、前後のコンテキストから既然態でなければならぬ所であるから、△スワラシ、チヨツタ△は言い誤りで、△スワツチヨラシ、タ△が正しいことになる。

因みに、標準語の「お座りになって居た」(「座られて居た」と「座っておいでになつた」)「座」(「座られた」との間には、まさにこの様な相異は見られないようである。むしろ両者の違いは、敬語法の様相の相異で、どちらのスタイルが好まれつつあるかの観点から、見られるべき問題である。「目下の傾向としては、『て』よりも下の方を敬ふのが少くとも東京などでは顕著にあらはれてゐる事実であつて」「一続きの文の最後の方に尊敬語を用ゐるだけで、とにもかくにも先方に対して礼儀を失ふことはなきさうな事実が明らかに存在」するのである。しかし一方、「泣いていらっしゃいます」「お泣きになってゐます」では満足出来ず、「愈以て沢山用ゐられるだけ用ゐてみよ」といふ心理も自然に見ることが出来るやうで、「お泣きになっていらっしゃいます」というように「幾つも敬語を重ねなければ敬ひの心持があらはせないやうに感じられてゐる」(以上、今泉忠義著「現代語の性格」一五一―六四頁)傾向も存する模様である。

注⑦ **ネコサヤ**

「サエ(サイ)」が、「 $\wedge$ ai:æ:」に從ひ、「サエー(sae:)」 $\wedge$ サエ(sae)となるべきところ、丁寧(二音に発音しよう)として「サヤ(saja)」となつたものであらう。徳島県(美馬郡)でも「知事でサヤおじぎに来る」と言う由。

注⑧ **オソラケーテ**

「オソ(窓)ラカシテ」 $\wedge$ オソラカイテ $\wedge$ オソラケーテ $\wedge$ 。「 $\wedge$ オソラカス」 $\wedge$ 「 $\wedge$ オソレル」 $\wedge$ に対する「 $\wedge$ カス他動詞」 $\wedge$ 。「 $\wedge$ オドス・アヤス・ダマス」 $\wedge$ に対する「 $\wedge$ オドカス・アヤカス・ダマカス」 $\wedge$ は、両者とも他動詞であるが、「 $\wedge$ オドロク」 $\wedge$ に対する「 $\wedge$ オドロカス」 $\wedge$ は、自動詞に対する他動詞。「 $\wedge$ オビエル」 $\wedge$ 「 $\wedge$ 」に對

する「 $\wedge$ オビヤカス」(他)と同様、「 $\wedge$ オソレル」 $\wedge$ 「 $\wedge$ オソレカス」 $\wedge$ 「 $\wedge$ オソラカス」 $\wedge$ という逆行同化で、「 $\wedge$ オドロカス」 $\wedge$ への類推から生まれた語であらうか。

注⑨ **キタデツテ、テ、テ、イツタ、テ、テ、イツタ**

「 $\wedge$ テ」 $\wedge$ は、語源的には「 $\wedge$ トイッテ」 $\wedge$ であらうが、「 $\wedge$ イッテ」 $\wedge$ と共に「 $\wedge$ テ」 $\wedge$ と使用される時は、語源的には意識されず、既に助詞化(「 $\wedge$ ト」 $\wedge$ と等価)している(手帖1、Aの注⑩及び手帖2、Aの注⑩参照)。更に約言されて「 $\wedge$ テ」 $\wedge$ となる。「 $\wedge$ トイッテ」 $\wedge$ 「 $\wedge$ テ」 $\wedge$ ことは自然の勢である。

「 $\wedge$ デツテ」 $\wedge$ は「 $\wedge$ ソ(ド)」 $\wedge$ 「 $\wedge$ テツテ」 $\wedge$ の約言であらう。終助詞「 $\wedge$ ぞ」(よ)は、隠岐では通常「 $\wedge$ ソ」 $\wedge$ 「 $\wedge$ ド(島前に多い)」 $\wedge$ で、石見のように「 $\wedge$ デ」 $\wedge$ (「コロイヤルデ。——ソ・ド・セは下品とされる——山陰語法九五頁)とはならない。

注⑩ **デヤ、ワザツタ、エ、ソ**

「 $\wedge$ デヤ」 $\wedge$ は「 $\wedge$ dea」 $\wedge$ 「 $\wedge$ dia」 $\wedge$ で、「 $\wedge$ デヤ」(dea)にはなっていない。尚「 $\wedge$ タエソ」 $\wedge$ は「 $\wedge$ タダエド」 $\wedge$ で、「山陰語法」(八七頁)が連用形接続の接続助詞として整理している程、一語に固定している。

注⑪ **クワスルツダケン**

サ下二連体形語尾「 $\wedge$ スル」 $\wedge$ (使役)の促音化(ス)寸前の語形。注⑩参照。

注⑫ **トト、キテ**

「 $\wedge$ トト」 $\wedge$ は、促音脱落の短音形が順行同化(「 $\wedge$ ト」 $\wedge$ 「 $\wedge$ トト」 $\wedge$ )したもの。

注⑬ **フキシヤエ、テー**

△*se*△は、鳥根・鳥取では、様々に転化 (*se, ai, sei, ja* — 山陰方言三六九ペ) するが、ここでは△*se*△ (*sai*)△が △*ja*△ となっている。

### 注⑩ サガエエテ

△探して△が△サガシテ△サガエエテ△サガエエテ△サガエエテ (*sagashite*)△と相互同化したもの。

### 補注

この昔話は一見して、隣人相互の葛藤を描いた△隣の爺△型に属する話であること、明瞭である。△隣の爺△型は、わが国の昔話中でも特に発達していること、△花咲爺△△舌切雀△に見る如くであり、手帖1の△屁ひり爺△もこの型に属する。ここに挙げた話は、△隣の爺△型の中でも全国に亘って広い分布を持つ△地藏浄土△と△鼠の浄土△との混濁型で、地中訪問によって宝物を獲得するというモチーフを持つ異境訪問説話が、△隣の爺△型に固定したものと云つてよい。

△地藏浄土△は、次のような話型を持つ地底訪問説話で、青森・岩手・宮城・秋田・福島・栃木・新潟・富山・石川・岐阜・埼玉・千葉・静岡・島根・岡山・広島・香川・愛媛・高知・福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・鹿児島などの二五県及び琉球に亘って分布している。(岡歌著「日本昔話集成」第二部本格昔話2、六〇五―六三七)

#### 地藏浄土の話型

1 a 爺(婆)が団子(豆・握飯)を取り落し、穴の中に転がって行く跡を追って行く。

b 実子は穴のない籠(袋)、継子は穴のあいた籠(袋)を持って栗(椎)拾いに行き、継子は、夜になっても籠(袋)に満たず、途方に暮れて地藏の堂(軒窓)に泊めて貰う。

(△継子の栗拾い△型の発端)

2 a 地藏(神)が、その団子を食べたから返礼すると約束する。

b 爺(婆)が、地藏から団子の返礼に金銭や宝物を貰う。

(3・4へ発展せず、ここで結末をつけるのだが、△鼠たれ小僧△△龍宮童子△型と混濁した形跡が伺われる。5の後日譚は持つ。)

c 鬼がいて、婆(爺)を飯炊きにするが、如意の杓子で三粒の米が釜一杯になる。(3を越えて、4bに接続する。)

3 爺(継子)が地藏の後(天井)に隠れていると、鬼が来て、搏突を打ったり金を分けたたりするので、地藏に教えられた通り鶏の鳴き真似をすると鬼が逃げる。

4 a 爺(婆)はその金銭や宝物を持って帰る。

b 鬼の留守中に如意の杓子を持って帰る。(△鬼の子小綱△型と混濁した結末を持つものあり。)

5 隣の爺(婆・実子)が、まね損なって見破られ、打擲されたり殺されたりする。

各地方別に比較すると、土地柄から来る地域的相違がかなり明瞭に浮かび上がってくる。

東山道(青・岩・宮・福島・秋・栃など)

一、基本の話型は、1 a → 2 a → 3 → 4 a → 5 のコースをとる。

二、発端の△笠地藏△型になっている(2を越えて3に接続する)もの、及び△笠地藏△と混濁したのが見られる。

△笠地藏△は、「貧乏爺が正月の買物に行くと、地藏が雪(雨)に濡れているので、買物の金で笠を買ってかぶせる。食うものもなく寝るが、地藏が御礼の宝物や米・餅を運び、よい正月を迎えることができる。隣の爺が真似て失敗する」



という基本話型の話で、「日本昔話集成」は主題によって大歳の客V型に入れているが、△地藏浄土Vと同趣同型である。

三、爺の転がすものは、各地とも通常団子か握飯かであるが、東山道には土地柄豆が表われる。(△鼠の浄土Vでは、新潟・長野にも見られる)

北陸道(新・富・石など。——岐もここに入れる。)

一、基本話型は東山道と同様のコースである。

二、発端の△継子の栗拾いV型になっているものが見当たらぬ。

三、2bで結末をつける(5の後日譚はある)ものが見当たらぬ。

中国(島・岡・広など)

一、半ばは、東山道・北陸道と同様の基本話型を持つ。

二、半ばは、1a→2c→4b→5 という話型で、2

c・4bの箇所に入鬼の子小綱V型との混淆が見られる。

東海道(千・埼・静など)

他の地方に比し報告数が僅少で、特徴付け難い。2b・4

bを持たぬ(2cは鬼との交換)外、東山・北陸・中国の各地方

の特徴を併せ持つ。

四国(香・愛媛・高など)

この地方も報告数僅少。上述の話型を併せ持つ。

九州

一、基本の話型は、1b→3→4a→5 のコースをと

る。

二、発端の1bは△継子の栗拾いV型で、△継子Vを単なる△爺Vに置き換えて、更に△地藏浄土Vに近くした混淆型も見当たらぬ。

△鼠の浄土Vは、次の様な話型を持ち、青森・岩手・福島・秋田

・山形・栃木・長野・岐阜・新潟・石川・滋賀・静岡・愛知・奈良  
・兵庫・鳥根・岡山・広島・香川・愛媛・高知・福岡・佐賀・長崎  
・熊本・大分・鹿児島(二七県及び琉球に亘って分布している。  
〔日本昔話集成〕第二部本格昔話2、六三七―六六〇)

鼠の浄土の話型

1 a 爺が握飯(団子)を穴の中に転がして追って行き、鼠(鬼)の浄土に行き着く。

b 爺が鼠に握飯をやると、鼠は返礼のため爺を招待する。

c 鼠が爺に助けて貰った御礼に迎えに来る。

2 鼠が餅(米・黄金)搗きをしたり、踊ったりする。(時に爺にも御馳走する。)

3 a 爺は鼠から宝物を貰って帰る(家が富み、栄える)。

b 爺は猫真似して鼠を追いやり、餅(米・黄金)を持って帰る。

4 隣の爺が真似損なつて、穴に埋もれたり、引っかかれたり、殺されたりする。

基本話型は、1a→2→3a→4のコースをとるが、

一、東山道(青・岩・福島・秋・山・栃など)と北陸道(新・石など―長野

・岐・滋もここに入れる)には、1b・1cの発端を持つものが多く見られる。

二、北陸道と中国(島・岡・広など―兵もここに入れる)及び九州(琉球も)には、3bの結末を持つ(4の後日譚も持つ)ものが多く見られる。

一、二を通じて言えば、北陸道はすべての話型を併せ持っていることになる。

既に報告されている隠岐の話型は、

△地藏浄土Vでは、1a→2c→4b→5 (西之島町黒木・

浦野)で、中国地方に多くの類型を持つ。

△鼠の浄土▽では、土地柄、烏賊釣りに行った爺が帰って来て鼠の歌声を聞くことから始まり、2→3 b→4 (「猫」のコースをとる。前者同様中国地方の異型ではない。

以上の諸型と比較するため、本稿で報告する昔話(以下△本話▽といふ)の話を抜き出すと、次のようになる。

① 爺と婆とが残った一つの焼飯を譲り合っていると、穴の中に転がり込む。

② 追いかけて行き、途中に並んでいた地蔵に行方を問う。

③ 小屋があつて、鼠が歌を唱い乍ら米を搗いている。

④ 爺が猫真似すると、鼠は驚いて逃げ去る。

⑤ 爺は鼠の捨てて逃げた米を持って帰る。

⑥ 隣の爺が真似損なつて鼠に咬まれる。

明らかに△鼠の浄土▽に△地蔵浄土▽の結び付いた混濁型である。両型の根本のモチーフは同様であり、岩手(奥上南伊弉土淵村)には、両者が殆んどその儘結合した話型のものもあつて、或いは本来連続していたものが後に分離したものか、とも考えられなくはないが、これほど多数の分布を見乍ら次に抜き出す程度にしか混濁型の見られない所から推すと、寧ろ別の話型であつたものが混濁していったのだ、と解すべきではなからうか。

単独の両型と混濁型との関係(①-⑥は本話型の番号と一致する)

地蔵 ① 団子の跡 ② 地蔵が食つて、 鶏の鳴き真似で 爺は宝物を 隣の爺の返礼約束 鬼が逃げ去る 持ち帰る 真似損ない

浄土 1 a → 2 a → 3 → 4 a → 5

鼠の 1 a → 2 → 3 b → 4

浄土 ① 団子の跡 ② 鼠が米餅を ③ 猫真似で鼠 ④ 爺は米餅 ⑤ 隣の爺の ⑥ 鼠が逃げ去る ⑦ 爺は米餅 ⑧ 真似損ない

浄土 ① 団子の跡 ② 鼠が米餅を ③ 猫真似で鼠 ④ 爺は米餅 ⑤ 隣の爺の ⑥ 鼠が逃げ去る ⑦ 爺は米餅 ⑧ 真似損ない

△地蔵の浄土▽の「1 a → 2 a」の話線が△鼠の浄土▽の「2」に移り、以下「2 → 3 b → 4」と展開したもので、②に於いてこの連結のために、「その団子を食つたから返礼する」と約束する」地蔵が「ただ団子の行方を教える」地蔵に変転したのみで、「鶏と猫、鬼と鼠の置換以外」多くの混濁は必要としなかつた。両型の話線を併せ見る時、その混濁は極めてスムーズなものであつたことが分かる。

本話の特徴

一、転がすものは△焼飯▽である。転がるものであるから、丸い弁当物なら何でもよい所、全国共通して△団子・握飯▽がその殆んどを占め(餅は僅少だが全国に亘)ている。例外と言つてよいのは、上述した東山道の△豆▽ (ここには△米・粟粒▽△煎餅▽などの五例も見当た)るとこの△焼飯▽とである。

△焼飯▽が見当たるのは、隠岐(西之島町黒木)の外秋田・新潟(以上地蔵浄土)、△焼餅▽の出でくるのは、隠岐(西之島町浦郷)の外新潟(地蔵浄土)岩手・岐阜(以上鼠の浄土)など数具のみで、隠岐の外は東山道・北陸道に限られている。弁当も所変われば品変わるで、何でもないことの様乍ら、以下の諸点(二及び五項)と併せ見る時、やはり隠岐とこれらの地方との関連性を思はずにはいられない。

二、第①段落——残つた一つの焼飯(団子)を△ジークエ、ババクエ▽と譲り合う段落は、本話の外隠岐の黒木・浦郷の二話に見られるが、その他の地方では福島(奥南会津郡、団子—地蔵浄土)石川(奥能美郡、団子—鼠の浄土)の二話位である。この点でも、隠岐は東山道・北陸道と符合している。

三、第②段落——地蔵が焼飯(団子)を食つてしまふのではなく、本話のように地蔵がただ案内役を勤めるだけになつてゐる段落は、隠岐の黒木・浦郷の外次の数具に見られる(小異は存する)。

埼玉・長崎のように「道に迷って地蔵の所に泊る」という形のもの——恐らく八継子の粟拾いV型との混淆であろう。「俵に入ったが遊んで行け」という宮城のもの、すぐに「教えるから、膝・肩・頭に上れ」という岩手のもの——簡略形。これらをさて置き、案内振りを詳説したものと云えば、青森・千葉・広島らに見られる「地蔵が並んでいて、団子の行方を探ねると次の地蔵に聞いて見よと答える。次々に聞いて行くと、最後の三番目とも地蔵が食ったと答える」もので、本話はこの系統であろう。いずれにせよ、この段落は僅少乍ら多地方に亘って見られ、どの地方の特徴というものではない。

尚、八地蔵浄土Vでは、転がる団子に行方を探ねると「奥のみ山の地蔵のもとまで」などと答えるものが多く見られるが、八鼠の浄土Vにこれの混入しているのは新潟(団子々々どこまでや。ふるしき地蔵のもとまでや)ぐらいいである。

四、第③段落——鼠の米(餅)搗き(白挽き・機械じ)歌は、全国に亘って次の三種に分類し得る。

イ、幾つもの年になっても猫の声は聞きたくない(七十になっても、八十になっても、にやおの声きたかね、七ちよう八ちようかっからもっから——岩手)

ロ、猫さえ居らなければ鼠の世界は極楽だ(猫といちちとてんば居らにや、鼠はわかまおれらまま——石川)

ハ、その他、教例(猫がにやごたら逃げべしな——岩手、鼠と木挽きは引かねば食んね——新潟、何がこわいというたて、猫ほどこわいものはなし——大分。)

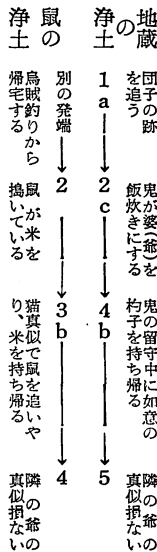
ハは僅少。東山道にはイが多く、北陸以南にはロが多いといった傾向はあるが、すべて全国に亘っている。従って、本話は口に属するが、特にどの地方と関連するものだとは言い得ない。

五、話型について——上述したように、本話の外に、隠岐からは八

地蔵浄土V二例八鼠の浄土V一例が報告されている。前者の話型はA1a→2c→4b→5Vで中国系統、後者の話型はA別の発端→2→3b→4Vで中国及び北陸・九州と同系統のものである。隠岐も島根であり、中国であることが、この両型に示されているのはあるが、本話は、どうもこれら隠岐の両型の混淆ではなさそうである。

この関係図(2)と先に示した八単独の両型と混淆型との関係(1)とを併せ見ると、図(1)が鶏と猫及び鬼と鼠とを置換すると、矢印への混淆が極めてスムーズに進行するという関係図であるのに対し、図(2)は余りにも異質過ぎる話線の並立関係にある。

図(2)



中国の八地蔵浄土Vには別に図(1)の如き、東山道・北陸道にも共通のA1a→2a→3→4a→5Vという話型が存するのであるが、黒木・浦郷の二話はA1a→2c→4b→5Vの話型をとっている。この話型からは、本話のような混淆型は起り難い。

一方、図(1)の如き話線を辿って混淆したと思われる話型が、東山道・北陸道(及び広島)に僅か乍ら見当る。八地蔵浄土Vと八鼠の浄土Vとの両者が、混淆というより連接した形になっている岩手のものをさし置くと、青森(奥津軽郡黒石村及び同藤崎町)の二

例、新潟（県佐渡郡高千村）の一例及び広島（県世羅郡広定村）の一例がそれである。中でも新潟のものは殆んど本話の話型と差異を持たない。

これらと本話との関連性はいかがであらう。勿論、混淆が各地方で夫々独自に行われ、結果として相似の話型を持つに至る事情も考えられる。だが、全国に亘ってこれ程広く分布している話の場合、そう言い切るには混淆型が少なきに過ぎはしないだろう。又、殆んど本話と同話型のものが新潟に見られ、青森にも近い話型のもが見当たるといふ点も偶然の二字では片付けられない気がする。混淆の起り易い話型を備えていた地方として、まず拾い出されるのは北陸道である。北陸と隠岐とは海路で密接に結びれて居り（庄次郎・宗次郎とも——音訳——という隠岐の船歌には函館から下関までの舟路を審きに歌った歌詞がある）、両地方の関係は、隠岐と島根本土との結び付きに劣りはしなかったであらう。ただ広島に一例乍ら類型の存することが、他の中国地方（特に島根）にも混淆型の存する可能性を考えさせる。しかし広島のものには「鼠が宝物を持つて来たので、猫真似してそれを持ち帰る」といふ話線で、「餅（米）搗き」でなく「宝物を持って来る」といふ点、△鬼▽ではなく△鼠▽ではあつても地蔵型そのもので、餅（米）搗き歌も無い所、北陸道・東山道のものとは相異している。（或いは広島生産のものか。）

以上（一・二・五項を併せ見ると）例外的な分布も見られなくはないが、どちらかといえば、本話の系統は北陸・東山系に属するものようである。手帖「△尻ひり爺」に於いても、「隠岐の尻の音は、島根県を始めとする中国（及び近辺の）地方によりもむしろ滋賀以北及び九州の港国に類似している」といふ傾向が見られた。その節、説き漏らしたが、地方に近い島前の浦郷（町史——横山彌四郎探集）には、

中国系の尻の音もうかがい得、島根本土との直接関係もなくはない。島根本土から二十里の海上に浮かび、裏日本の航路の要衝であつた隠岐島が、島根本土と交渉を持つ（單獨の両型は中国と異型ではない）と同時に、北陸道とも密接に関係した（混淆型の本話は北陸・東山系）とが、昔話の伝播にも表われているのではなからうか。

「全国音韻分布図」（『日本方言地図』第2部——金田一春彦作図）に於いて、△表日本・裏日本中間方言地帯▽と区画された地方は、△日本の千葉・埼玉をさて措けば、新潟と石川・富山及び島根（隠岐を含む）の三地方だけである。三地方が、それぞれ佐渡島、能登半島（能登島を抱く）島根半島・隠岐島という類似の地勢を有し、裏日本の航路の上で要衝として互に結び合っていた関係が、言語の上にも相似の性格を持たせるために役立たなかつたであらうか。

〔後記〕 本稿を草するに当たり、昔話の採録、文字化について、広戸惇（島根大学）内田兼四郎（賀茂小学校）の両氏から御示教、御援助を賜りました。又、調査に参加した島根・関西両大学の学生諸君、隠岐島地元の方達の御協力も多大なものでありました。記して厚く謝意を表します。

本稿は昭和三十三年度文部省科学研究費による研究の一部である。